樋口一葉

長谷川時雨

一

秋にさそわれて散る木の葉は、いつとてかぎりないほど多い。ことに霜月は秋の末、落葉も深かろう道理である。私がここに書こうとする小伝の主一葉（いちよう）女史も、病葉（わくらば）が、霜の傷（いた）みに得（え）堪（たえ）ぬように散った、世に惜まれる女（ひと）である。明治二十九年十一月二十三日午前に、この一代の天才は二十五歳のほんに短い、人世の半（なかば）にようやく達したばかりで逝（い）ってしまった。けれど布は幾百丈あろうともただの布であろう。蜀江（しょくこう）の錦（にしき）は一寸でも貴く得難い。命の短い一葉女史の生活の頁（ページ）に

は、それこそ私たちがこれからさき幾十年を生伸びようとも、とてもその片鱗にも触れることの出来ないものがある。一葉女史の味わった人世の苦味、諦めと、負じ魂との試練を経た哲学——

信実のところ私は、一葉女史を畏敬し、推服してもいたが、私の性質として何となく親しみがたく思っていた。虚偽のない、全くの私の思っていたことで、もし傍近くにいたならば、チクチクと魂にこたえるような辛辣なことを言われるに違いないというようにも思ったりした。それはいうまでもなくそんな事を考えたのは、一葉女史の在世中の私ではない、その折はあ

まり私の心が子供すぎて、ただ豪(えら)いと思っていたに過ぎなかった。明治四十五年に、故人の日記が公表(おおやけ)にされてからである。私は今更、夢の多かった生活、いつも居眠りをしていたような自分を恥じもするが――幾度かその日記を繙(ひもと)きかけては止(や)めてしまった。愛読しなかったというよりは、実は通読することすら厭(いや)なのであった。それは私の、衰弱しきった神経が厭(いと)ったのであったが、あの日記には美と夢とがあまりすくなくて、あんまり息苦しいほどの、切羽(せっぱ)詰った生活が露骨に示されているのを、私は何となく、胸倉(むなぐら)をとられ、締めつけられるような切なさに堪えられぬといった気

持ちがして、そのため読む気になれなかった。

しかし、今はどうかというに、私も年齢(よわい)を加えている。そして、様々のことから、心の目を、少しずつ開かれ風流や趣味に逃げて、そこから判断したことの錯誤(あやまち)をさとるようになった。この折こそと思って、私は長くそのままにしておいた一葉女史の日記を読むことにした。すこしでも親しみを持ちたいと思いながら――

で、お前はどう思ったか?

と誰かにたずねてもらいたいと思う。何故ならば、私はせまい見解を持ったおりに、よくこの日記を読まな

いでおいたと思ったことだった。拗（ひね）くれた先入観があっては、私はこの故人を、こう彷彿（ほうふつ）と思い浮べることは出来なかったであろう。よくこそ時機のくるのを待っていたと思いながら、日記のなかの、ある行にゆくと、瞼（まぶた）を引き擦（こす）るのであった。それで私に、そのあとでの、故人の感じはと問えば、私はこう答えたい気がする。

蕗（ふき）の匂（にお）いと、あの苦味

お世辞気のちっともない答えだ。四月のはじめに出る青い蕗のあまり太くない、土から摘立てのを歯にあてると、いいようのない爽（さわ）やかな薫（かお）りと、ほろ苦い味

を与える。その二つの香味（こうみ）が、一葉女史の姿であり、心意気であり、魂であり、生活であったような気がする。

文芸評に渡るようにはなるが、作物を通して見た一葉女史にも、ほろ苦い涙の味がある。どの作のどの女（ひと）を見ても、幽艶、温雅、誠実、艶美、貞淑の化身（けしん）であり、所有者でありながら、そのいずれにも何かしら作者の持っていたものを隠している。柔風（やわかぜ）にも得堪（えたえ）ない花の一片（ひとひら）のような少女、萩（はぎ）の花の上におく露のような手弱女（たおやめ）に描きだされている女たちさえ、何処にか骨のあるところがある。ことに「にごり江」のお力（りき）、「やみ

夜」のお蘭（らん）、「闇桜（やみざくら）」の千代子、「たま襷（だすき）」の糸子、「別れ霜」のお高（たか）、「うつせみ」の雪子、「十三夜」のお関（せき）、「経づくえ」のお園――と数えれば数えるものの、二十四年から二十八年へかけての五年間、二十五編の作中、一つとして同じ性格には書いてないが、その底の底を流れて、隠しても隠しきれない拗（す）ねた気質は、日記から読みとった作者の、どこか打解けにくいところのある、寂しい諦めと、我執（がしゅう）を見逃（のが）されない。

私は一葉女史の作中の人物をかりて、女史に似通っている点をあげて見たいと思った。も一つは、どの作

が作者の気に入っていた作か知りたいと思った。それよりも深く知りたいのは、どの作のどの女性が、最も深く作者の同情を得、共鳴のあるものかということであった。最も高く評価されたのは「濁り江」のお力、「十三夜」のお関、「たけくらべ」のみどりであったが、すべての女主人公を一固めにして、そして太く出た線こそ、女史の持っているほんとうの魂だという事が出来るであろう。

「経づくえ」は小説としては「にごり江」や「たけくらべ」に競べようもない、その他の諸作よりも決して勝れてはいない。その構想も『源氏物語』の若紫を

今様（いまよう）にして、あの華（はな）やぎを見せずに男を死なせ、遠く離れたのちに、男が死んだあとで、十六の娘がその人の情（なさけ）を恋うという、結末を皮肉にした短いものである。けれども、その少女お園の心持ちは、内気な少女（おとめ）には、よく頷（うなず）かれもし、残りなく書尽（かきつく）されてもいる。我と我身が怨（うら）めしいというような悩みと、時機を一度失えば、もう取返しのつかない、身悶（みもだ）えをしても及ばないくいちがいが、穏かに、寸分の透（すき）もなく、傍目（わきめ）もふらせぬようにぴったりと、悔（くい）というかたちもないものの中へ押込めてしまって、長い一生を、凝（じ）っと、消（きえ）てしまった故人の、恋心の中へと突（つき）進めてゆかせようとす

るのを、私は何とも形容することの出来ない、涙と圧迫とを感じずにはいられない。――動きのとれない苦しみを知る人でなければと思うと、私はお園の上から作者の上へと涙をうつすのであった。

――私の書方(かきかた)は、あんまり一葉女史を知ろうために、急ぎすぎていはしまいか。

或る人は女史を決して美人ではないといった。また馬場孤蝶(ばばこちょう)氏の記するところでは、美人ではなかったが決して醜い婦人ではない。先ず並々の容姿であったとある。親友の口からそう極(きわ)めがつけられているのを、

見も逢いもせぬ私が、何故美人にしてしまうのかと、審しまれもしようが、私が作物を通して知っている一葉女史は、たしかに美人というのを憚らぬと思う自信がある。写真でも知れるが、あの目のあの輝き、それだけでも私は美人の資格は立派にあるといいたい。脂粉に彩どられた傾国の美こそなかったかも知れないが、美の価値を、自分の目の好悪によって定める、男の鑑賞眼は、時によって狂いがないとはいえない。あまりお化粧もしなかったらしい上に、余裕のある家庭ではなし、ことに、

――なまめかしいという感じを与える婦人ではな

かった、艶(つや)はない、如何(いか)にもクスんだ所のある人であった、娘というよりは奥さんといいたいような人であった。当時の普通一般の女を離れて、男性の方に一歩変化しかけたように感ぜられる婦人であった。挙止(きょし)は如何にもしとやかであった。言葉はいかにも上品であった。何処に女らしくないというところは挙(あ)げ得られないにかかわらず、何処となく女離れがしているように感ぜられた。多分は一葉君の気魄(きはく)の人を圧するようなところがあったからであろう。要するに、共に語って痛快な婦人の一人であったろう。男が恋うることなし

に親しく交わりえられる婦人の一人だと私は思っていた。　――馬場氏記――

とあるのから見ても、そうした婦人（ひと）で、並々の容色と見えれば、厚化粧で人目を眩惑（げんわく）させる美女よりも、確かであるということが出来ようかと思われる。

その上に、もし一度（ひとたび）興起り、想漲（みなぎ）り来（きた）って、無我の境に筆をとる時の、瞳（ひとみ）は輝き、青白い頬（ほお）に紅潮のぼれば、それこそ他の模倣をゆるさない。引緊（ひきしま）った面に、物を探る額の曇り、キと結んだ紅い唇（くちびる）、懊悩（おうのう）と、勇躍とを混じた表情の、閃（ひらめ）きを思えば、類型の美人ということが出来よう。

誰に聞いても髪の毛は薄かったという事である。背柄(せがら)は中位であったという。受け答えのよい人で話上手(じょうず)で、あったとも聞いた。話込んでくると頬に血がのぼってくる、それにしたがって話もはずむ。冷嘲(れいちょう)な調子のおりがことに面白かったとかいう。礼儀ただしいので軀(からだ)をこごめて坐っているが、退屈をすると鬢(びん)の毛の一、二本ほつれたのを手のさきで弄(いじ)り、それを見詰めながらはなす。話に油がのってくると、間(あいだ)をへだてていたのが、いつの間にか対手(あいて)の膝(ひざ)の方へ、真中にはさんだ火鉢(ひばち)をグイグイ押してくるほど一生懸命でもあったという。

半日に一枚の浴衣（ゆかた）をしたてあげる内職をしたり、あるおりは荒物屋（あらものや）の店を出すとて、自ら買出しの荷物を背負（せお）い、ある宵（よい）は吉原（よしわら）の引手茶屋（ひきてぢゃや）に手伝いにたのまれて、台所で御酒のおかんをしていたり、ある日は「御料理仕出し」の招牌（かんばん）をたのまれて千蔭（ちかげ）流の筆を揮（ふる）い、そうした家の女たちから頼まれる手紙の代筆をしながらも、

小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ、いまだよに出したるものもなく、我が心ゆくものもなし、親はらからなどの、なれは決断の心うとく、跡のみかへり見ればぞかく月日ばかり重ぬる

なれ、名人上手と呼ばるゝ人も初作より世にもてはやさるゝべきにはあるまじ、非難せられてこそそのあたひも定まるなれと、くれ〴〵せめらる、おのれ思ふにはかなき戯作(げさく)のよしなしごとなるものから、我が筆とるはまことなり、衣食のためになすといへども、雨露しのぐための業(わざ)といへど、拙なるものは誰が目にも拙とみゆらん、我れ筆とるといふ名ある上は、いかで大方のよの人のごと一たび読みされば屑籠(くずかご)に投げらるゝものは得(え)かくまじ、人情浮薄にて、今日喜ばるゝもの明日は捨てらるゝのよといへども、真情に訴へ、真情をう

つさば、一葉の戯著といふともなどかは価のあらざるべき、我れは錦衣（きんい）を望むものならず、高殿（たかどの）を願ふならず、千載（せんざい）にのこさん名一時のためにえやは汚がす、一片の短文三度稿をかへて而（しか）して世の評を仰がんとするも、空（むな）しく紙筆のつひへに終らば、猶（なお）天命と観ぜんのみ。（一葉随筆、「森のした草」の中より）

おろかやわれをすね物といふ、明治の清少（せいしょう）といひ、女西鶴（さいかく）といひ、祇園（ぎおん）の百合（ゆり）がおもかげをしたふとさけび小万茶屋がむかしをうたふもあめり、何事ぞや身は小官吏の乙娘（おとむすめ）に生まれて手芸つたはら

ず文学に縁とほく、わづかに萩の舎が流れの末をくめりとも日々夜々の引まどの烟こゝろにかかりていかで古今の清くたかく新古今のあやにめづらしき姿かたちをおもひうかべえられん、ましてやにほの海に底ふかき式部が学芸おもひやらるるままにさかひはるか也、たゞいささか六つななつのおさなだちより誰つたゆるとも覚えず心にうつりたるもの折々にかたちをあらはしてかくはかなき文字沙たにはなりつ、人見なばすねものなどことやうの名をや得たりけん、人はわれを恋にやぶれたる身とやおもふ、あはれやさしき心の人々に

涙そそぐ我れぞかし、このかすかなる身をささげて誠をあらはさんとおもふ人もなし、さらば我一代を何がための犠牲などこと〲敷（しく）とふ人もあらん、花は散時（ちりどき）あり月はかくる時あり、わが如きものわが如くして過ぬべき一生なるに、はかなきすねものの呼名（よびな）をかしうて、

　うつせみのよにすねものといふなるは
　　つま子もたぬをいふにや有らん

をかしの人ごとよな（一葉随筆、「棹（さお）のしづく」より）

と、心を高く持っていたこの人のことを、私は自分の

不文を恥じながらも、忠実に書かなければならないと思う。ともかくも、私はまずこの人の生れた月日と、その所縁のつづきあいとを書落さぬうちにしるしておこう。

二

一葉女史は江戸っ子だ、いや甲州生れだという小さな口論争（くちあらそい）を私は折々聴いた。それはどっちも根拠のないあらそいではなかった。女史が生れたのは東京府庁のあった麴町（こうじまち）の山下町に初声（うぶごえ）をあげた。明治五年に

は他（ほか）にどんな知名の人が生れたか知らぬが、私たち女性の間には、ことに文芸に携わるものには覚えていてよい年であろう。数え年の六歳に本郷（ほんごう）小学校へ入学した。その年は明治の年間でも、末の代まで記憶に残るであろう西南戦争のあった年で、西郷隆盛が若くから国家のために沸かした熱血を、城山の土に濺（そそ）いだ時である。翌年の七歳には特に手習（てならい）師匠にあがった。一葉女史の筆蹟が実に美事であるのも、そうした素養がある上に、後に歌人で千蔭流の筆道の達者であった中島師についたからだ。十五年の夏には下谷（したや）池（いけ）の端（はた）の青海小学校へ移り、その翌年に退校した。その後は他で勉

学したとは公にはされていない。十九年になって中島歌子刀自（とじ）の許（もと）へ通うまでは独学時代であったろうと考えられる。

それまでが女史の両親の揃（そろ）っていた勉学時代、少女時代で、甲州は両親の出生地であった。父君は樋口則義（ひぐちのりよし）、母君は滝（たき）といって、安政年間に志をたてて共に江戸に出、母は稲葉家（いなばけ）に仕え、父は旗本菊池家に奉公し、後に八丁堀（はっちょうぼり）衆（与力同心）に加わった。そして維新後に生れた女史は、両親の第四子で二女である。甲斐（かい）の国東山梨郡大藤村は女史の両親を生んだ懐（なつか）しい故郷なので。

小説「ゆく雲」の中には桂次という学生の言葉をかりて、

我養家は大藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峰々垣をつくりて、西南にそびゆる白妙の富士の嶺はをしみて面かげを視さねども、冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚といひては甲府まで五里の道をとりにやりて、やう〳〵鮪の刺身が口に入る位——

とある。その後の章には、

小仏の峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥沢も過ぎて猿はし近くにその夜

は宿るべし、巴峡(はきょう)のさけびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むすび憂(う)く、これにも腸(はらわた)はたたるべき声あり勝沼よりの端書(はがき)一度とゞきて四日目にぞ七里(ななさと)の消印ある封状二つ……かくて大藤村の人になりぬ。

と故郷の山野の景色がかなり細叙してある。

　父則義氏は廿二年ごろに世を去られた。それからの女史の生活は流転をきわめている。陶工であった兄の虎之助氏は早くから別に一家をなしていたので、女史は母滝子と、妹の国子と、疲細(かぼそ)い女三人の手で、その

日の煙りを立てなければならなかった。廿四年廿歳の時から廿九年までの六年間が製作の時代であった。

生活の流転は、その感想、随筆、日記、が明らさまに語っている。女史の幼時にも彼女の家は転々した。本郷に移り下谷に移り、下谷御徒町へ移り、芝高輪へ移り、神田神保町に行き、淡路町になった。其処で父君を失ったので、その秋には悲しみの残る家を離れ本郷菊坂町に住居した。その後下谷竜泉寺町に移った。俗に大音寺前という場処で、吉原の構裏であった。一葉の家は京町の非常門に近く、おはぐろ溝の手前側であったという。ここの住居の時分から、女史

の名は高くなったのである、そして生活の窮乏も極に達していた。荒物店（あらものや）をはじめたのも此家（ここ）のことであれば、母上は吉原の引手茶屋で手のない時には手伝いにも出掛けた。女史と妹の国子とは仕立（したて）ものの内職ばかりでなく蟬表（せみおもて）という下駄（げた）の畳表（たたみおもて）をつくることもした。一葉女史のその家での書斎は、三畳ほどのところであったという。荒物店の三畳の奥で、この閨秀（けいしゅう）の傑作が綴（つづ）りだされようと誰が知ろう、それよりもまた、その文豪が、朝は風呂敷包みを背負って、自ら多町（たちょう）の問屋まで駄菓子を買出しにゆき、蠟燭（ろうそく）を仕入れ、羽織を着ているために嘲笑（ちょうしょう）されたと知ろうか。彼女の家

から灯が暁近くなるまで洩(も)れるのは、彼女の創作のためばかりではなかった。あの、筆をもてば、倏忽(たちどころ)に想をのせて走る貴(とうと)い指さきは、一寸の針をつまんで他家の新春の晴着(はれぎ)を裁縫するのであった。半日に一枚の浴衣(ゆかた)を縫いあげるのはさして苦でもなかったらしいが、創作の気分の漲(みなぎ)ってくるおりでも、米の代、小遣(こづか)い銭のために齷齪(あくせく)と針をはこばなくてはならなかったことを想像すると、わびしさに胸が一ぱいになる。明治廿五年の正月には、元日ですら夜まで国子氏と仕立物をしていたという事を日記が語っている。

国子当時蟬表(せみおもて)職中一の手利(てきき)に成(なり)たりと風説あり

今宵(こよい)は例より、酒甘(うま)しとて母君大いに酔(よい)給ひぬ。
――片町といふ所の八百屋(やおや)の新芋(いも)のあかきがみえしかば土産にせんとて少しかふ、道をいそげばしとど汗に成りて目にも口にもながれいるをはんけちもておしぬぐひ〳〵して――

とあるのにもその生活の一片が見られる。父の則義氏は漢学の素養もあり文芸の何物かをも知っていられたが、母君は普通の気量(きがさ)な、かなり激しい気質の人であったらしい。日記にあらわれた借財のことは、廿年の九月七日にはじまっている。そして、

――我身ひとつの故成(ゆえな)りせばいかゞいやしきおり

立(たち)たる業(ぎょう)をもして、やしなひ参らせばやとおもへど、母君はいといたく名をこのみ給ふ質(たち)におはしませば、児(じ)賤業をいとなめば我死すともよし、我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ、そもことはりぞかし、我両方(わがふたかた)ははやく志をたて給ひてこの府にのぼり給ひしも、名をのぞみ給へば成りけめ。

とあるにも母君の面影が知れる。そうした気位が高くていながら、乏しい暮しのために、しかもそうした堅気(かたぎ)の士族出が、社会の最暗黒面である廓(さと)近くに住居して、場末の下層級の者や、流れ寄った諸国の喰詰(くいつ)め

ものや、そうでなくても闇（やみ）の女の生血（いきち）から絞りとる、泡（あぶ）く銭（ぜに）の下滓（かす）を吸って生きている、低級無智な者の中にはさまれて暮していなければならなかった母君の、ジリジリした気持ち――（気勝者（きしょうもの））といわれる不幸（ふしあわせ）な気質は、一家三人の共通点であった。

　一葉女史が近視眼だったのは、幼時土蔵の二階の窓から、ほんの黄昏（たそがれ）の薄明りをたよりにして、草双紙（くさぞうし）を読んだがためだという事ではあるが、そうした世帯の、細心（ほそしん）の洋燈（ランプ）の赤いひかりは、視力をいためたであろうし、その上に彼女は肩の凝る性分で、かつて、年若い女史にそう早く死の来ることなどは、誰人（たれ）も思いよら

なかったおり（死の六年前に）医学博士佐々木東洋氏が「この肩の凝りが下へおりれば命取りだから大事にせよ」と言われたということなどを思って見ても、早世は天命であったかも知れないが、あまり身心を費消させた生活が、彼女の死を早めさせたのだ。

私は頃日（このごろ）、馬琴（ばきん）翁の日記を読返して見て感じたのは、あの文人が八十歳にもなり、盲目にもなっていながら、著作を捨てなかった一生が、女史のそれと同様に、焼火箸（やけひばし）を咽喉（のど）もとに差込まれるような感じをさせることであった。

女史の記録を読むと、明治廿四年――（一葉廿歳の時）十月十日に兄の家は財産差押えになるという通知をうけたくだりに、金三円斗（ばか）りもあれば破産の不幸にも至るまいという書状から推（お）しても、杖（つえ）とも頼む男兄弟の、たよりにならなかったことがしれ、かえって妹たちの方が苦しいなかからその急を救った。

「家の方は私の稽古着（けいこぎ）を売ってもよいから」といって、親子の膏（あぶら）であり、血となる代（だい）の金四円を、母を車に乗せて夜中ではあれど届けさせた。

ある時は貧に倦（うん）じた老女の繰言（くりごと）とはいえ、

「あな侘（わび）し、今五年さきに失（うせ）なば、父君おはしま

すほどに失なば、かゝる憂き、よも見ざらましを我一人残りとゞまりたるこそかへす〴〵口をしけれ、我詞（ことば）を用ひず、世の人はたゞ我れをぞ笑ひ指さすめる、邦（くに）も夏もおだやかにすなほに我やらむといふ処、虎之助がやらむといふ処にだにしたがはゞ何条ことかはあらむ、いかに心をつくりたりとて手を尽したりとて甲斐（かい）なき女の何事をかなし得らるべき、あないやいやかかる世を見るも否（いや）也」と朝夕に母に掻（かき）くどかれては、どれほどに心苦しかったであろう。おなじ年（廿六年四月十三日の記に）、

母君更（ふけ）るまでいさめたまふ事多し、不幸の子にな

らじとはつねの願ひながら、折ふし御心(みこころ)にかなひ
難きふしの有(ある)こそかなし。

とあるに知る事が出来る。

朝には買出しの包みを背負って、駄菓子問屋の者たちから「姐(ねえ)さん」とよばれ、午後には貴紳の令嬢たちと膝(ひざ)を交えて「夏子の君」と敬される彼女を、彼女は皮肉に感じもした。けれども恩師中島歌子は、一葉の夏子を自分の跡目をつぐものにしようとまで思っていたのであった。であればこそ、同門の令嬢たちも、一葉という文名嘖々(さくさく)と登る以前にも、内弟子同様な身分である夏子を卑しめもしなかったのであろう。

ある時、女史は雨傘を一本も持たなかった。高下駄(あしだ)の爪皮(つまかわ)もなかった。小さい日和洋傘(ひよりがさ)で大雨を冒(おか)して師のもとへと通った。またある時は（新年のことであったと思う）晴着がないので、国子の才覚で羽織の下になるところは小切(こぎ)れをはぎ、見える場処(ところ)にだけあり合せの、共切(ともぎ)れを寄せて作った着物をきていったことがある。勿論裾廻(もちろんすそまわ)しだけをつけたもので、羽織が寒さも救えば恥をも救い隠したのである。そうしても師の許(もと)へ顔をだす事を怠(おこた)らなかったわけは、他(ほか)にもあるのであった。歌子は裁縫や洗濯(せんたく)を彼女の家に頼んで、割(わり)のよい価を支払らっていた。師弟の情誼(じょうぎ)のうるわしさ

は、あるおり、夏子に恥をかかせまいとして、歌子は小紋ちりめんの三枚重ねの引（ひき）ときを、表だけではあったが与えもした。

「蓬生日記（よもぎう）」の十月九日のくだりには、

師の君に約し参らせたる茄子（なす）を持参す。いたく喜びたまひてこれひる飯（げ）の時に食はばやなどの給ふ、春日（かすが）まんぢうひとつやきて喰（く）ひたまふとて、おのれにも半（なかば）を分（わけ）て給ふ。

とあるにも師弟の関係の密なのが知られる。けれども歌子は一葉をよく知っていた。あるおり『読売新聞』の文芸担当記者が、当時の才媛について、萩の屋門下

の夏子と龍子（たつこ）——三宅花圃（みやけかほ）女史——の評を求めたおり、歌子は、龍子は紫式部であり夏子は清少納言であろうと言ったとか、一葉も自分で、清少納言と共通するもののあるのを知っていたのかとも思われるのは、随感録「棹（さお）のしづく」に、

少納言は心づからと身をもてなすよりは、かくあるべき物ぞかくあれとも教ゆる人はあらざりき。式部はおさなきより父為時がをしへ兄もありしかば、人のいもうととしてかずかずにおさゆる所もありたりけんいはゞ富家に生れたる娘のすなほにそだちて、そのほどほどの人妻に成りたるものと

やいはまし——仮初(かりそめ)の筆すさび成りける枕の草紙をひもとき侍(はべ)るに、うはべは花紅葉(もみじ)のうるはしげなることも二度三度見もてゆくに哀れに淋しき気(け)ぞ此中(このなか)にもこもり侍る、源氏物がたりを千古の名物とたゝゆるはその時その人のうちあひてつひにさるものゝ出来(いでき)にけん、少納言に式部の才なしといふべからず、式部が徳は少納言にまさりたる事もとよりなれど、さりとて少納言をおとしめるはあやまれり、式部は天(あめ)つちのいとしごにて、少納言は霜ふる野辺にすて子の身の上成るべし、あはれなるは此君やといひしに、人々あざ笑ひぬ。

と同情している。

　とはいえその間に女史一代の天華は開いた。

「名誉もほまれも命ありてこそ、見る目も苦しければ今宵は休み給へ」

と繰返し諫(いさ)める妹のことばもききいれず、一心に創作に精進(しょうじん)し、大音寺前(だいおんじまえ)の荒物屋の店で、あの名作「たけくらべ」の着想を得たのであった。けれどもまた、漸く死の到来が、正面に廻って来たのでもあったが、そうとは知りようもなく、ただ家の事につき、母を楽しませる事についても、一層気掛りの度合(どあい)が増したものと見え、彼女は相場(そうば)をして見ようかとさえ思ったのだ。

私は此処まで書きながら、私も母の望みを満(みた)そうと、そんな考えを起した事が一再ならずあったので、この思いたちが突飛(とっぴ)ではない、全く無理もないことだと肯定する。その相場に関して、「天啓顕真術本部」という、妙な山師のところへ彼女がいったことから、すこしばかり恋愛をさがしてみよう。

荒物店(あらものや)を開いた時のことも書残してはならない。

――夕刻より着類(きるい)三口持ちて本郷いせ屋にゆき、四円五十銭を得、紙類を少し仕入れ、他のものを二円ばかり仕入れたとある。

今宵はじめて荷をせをふ、中々に重きものなり。

ともいい、日々の売上げ廿八、九銭よりよくて三十九銭と帳をつけ、五厘六厘の客ゆえ、百人あまりもくるため大多忙だと記（しる）したのを見れば、

なみ風のありもあらずも何かせん
一葉（ひとは）のふねのうきよなりけり

と感慨無量であった面影が彷彿（ほうふつ）と浮かんでくる。

三

廿七年二月のある日の午後に、本郷区真砂町（まさごちょう）卅二番地の、あぶみ坂上の、下宿屋の横を曲ったのは彼女で

あった。その路は馴染のある土地であった。菊坂の旧居は近かった。けれども其処を歩いていたのは、謹厳深い胸に問いつ答えつして、様々に思い悩んだ末に、天啓顕真術会本部を訪れようとしていたのであった。

黒塀の、欅の植込みのある、小道を入って、玄関に立った彼女は、その家の主、久佐賀先生というのは、何々道人とでもいうような人物と想像していたのであろう。秋月と仮名して取次ぎをたのんだ。

彼女は久佐賀某に面接したおり、

(逢見ればまた思ふやうの顔したる人ぞなき)

と、『つれづれ草』の中にある詞（ことば）を思出しながら、四十ばかりの音声の静かにひくい小男に向（む）合（き）った。

鑑定局という十畳ばかりの室（へや）には、織物が敷詰められてあり、額は二ツ、その一つには静心館と書してあり、書棚、黒棚、ちがい棚などが目苦（めまぐるし）いまでに並べたててあり、床（とこ）の間（ま）には二幅対（にふくつい）の絹地の画、その床を背にして、久佐賀某は机の前に大きな火鉢を引寄せ、しとねを敷いていて彼女を引見したのであった。

「申歳（さるどし）の生れの廿三、運を一時に試（ため）し相場をしたく思えど、貧者一銭の余裕もなく、我力にてはなしがたく、思いつきたるまま先生の教えをうけたくて」

と彼女は漸くに口を切った。それに答えた顕真術の先生は、

「実に上々のお生れだが金銭の福はない。他の福禄が十分にあるお人だ。勝(すぐ)れたところをあげれば、才もあり智もあり、物に巧(たくみ)あり、悟道の縁(えに)しもある。ただ惜むところは望(のぞみ)が大きすぎて破れるかたちが見える。天稟(てんぴん)にうけえた一種の福を持つ人であるから、商(あきな)いをするときいただけでも不用なことだと思うに、相場の勝負を争うことなどは遮(さえぎ)ってお止めする。貴女はあらゆる望みを胸中より退(のぞ)いて、終生の願いを安心立命しなければいけない。それこそ貴女が天から受けた

本質なのだから」

と言った。彼女は表面慎（つつま）しやかにしていても、心の底ではそれを聴いてフフンと笑ったのであろう。

「安心立命ということは出来そうもありません。望みが大に過ぎて破れるとは、何をさしておっしゃるのでしょう。老たる母に朝夕のはかなさを見せなければならないゆえ、一身を贄（にえ）にして一時の運をこそ願え、私が一生は破（や）ぶれて、道ばたの乞食（こじき）になるのこそ終生の願いなのです。乞食になるまでの道中をつくるとて悶（もだ）えているのです。要するところは、よき死処がほしいのです」

と言出すと、久佐賀は手を打っていった。

「仰(おっ)しゃる事は我愛する本願にかなっている」

彼女と久佐賀との面会は話が合ったのであろう。月を越してから久佐賀は手紙をもって、亀井戸の臥龍梅(がりょうばい)へ彼女を誘った。手紙には、

君が精神の凡ならざるに感ぜり、爾来(じらい)したしく交わらせ給わば余が本望なるべし

などと書いたのちに、

君がふたゝび来たらせ給ふをまちかねて、として、
とふ人やあるとこゝろにたのしみて
そゞろうれしき秋の夕暮

と歌も手も拙(つた)ないが、才をもって世を渡るに巧みなだけな事を尽してあった。とはいえ、それを受けたのは一葉である。そんな趣向で手中にはいると思うのかと、直(すぐ)に顕真術先生の胸中を見現(みあらわ)してしまった。日本全国に会員三万人、後藤大臣並びに夫人（象次郎(しょうじろう)伯）の尊敬一方(ひとかた)でないという先生も、女史を知ることが出来ず、そんな甘い手に乗ると思ったのは彼れが一代の失策であったであろう。

　彼女は久佐賀の価値(ねうち)を知った。彼れは世人の前へ被(かぶ)る面で、彼女も贏得(かちう)ることが出来ると思ったのであろう。彼女の手記には利己流のしれもの、二度と説を聴

けば、厭うべくきらうべく、面に唾きをしようと思うばかりだとも言い、かかるともがらと大事を語るのは、幼子にむかって天を論ずるが如きものだ、思えば自分ながら我も敵を知らざる事の甚だしきだと、自分をさえ嘲笑っている。けれども久佐賀の方では、自分の方は名と富と力を貯えているものだと、慢じていたのであろう。そしてその上に、一葉の美と才と、文名とを合せればたいしたものだと己惚たのであろう。他の者には洩すのさえ恥ているだろうと思われる貧乏を、自分だけがよく知っていると思いもしたのであろう。まだそれよりも、彼女が親と妹のために、物質の満足を

得させたいと願っている弱みを、彼れは自分一人が承知しているのだと思い上っていた。それのみならず彼れは、一葉を説破しえたつもりでいたかも知れない。

久佐賀は、金力を持って、さも同情あるように附込（つけこ）んでゆこうとした。そうした男ゆえ、俺ならば大丈夫良かろうと錨（いかり）をおろしてかかったのかも知れない。ともかく彼れはやんわりと、勝気なる、才女を怒らせないような文面をもって求婚を申入れた。それは廿七年の六月九日のことで女史が廿三歳の時である。

（貴女の御困苦が私の一身にも引くらべられて悲しいから、御成業の暁までを引受けさせて頂きたい。けれ

ども唯（ただ）一面識のみでは、お頼みになるのも苦しいだろうから、どうか一身を私に委（ゆだ）ねてはくれまいか。）

そんな風な申込に対して苦笑せずにいられるだろうか？　いうまでもなく彼女は彼れを評して、笑うにたえたしれもの、投機師と罵（ののし）っている。世のくだれるをなげきて一道の光を起さんと志すものが、目前の苦しみをのがれるために、尊ぶべき操（みさお）を売ろうかと嘲笑した。とはいえ、救いは願っていたのである。そうした悲しい矛盾を忍ばねばならなかった貧乏は、彼女に女らしさを失わぬ返事を認（したた）めさせた。

（どうかそういう事は仰しゃらないで、大事をするに

足りるとお思いになるならば扶助をお与え下さい。でなければ一言(ひとこと)にお断り下さい）と彼女は明らかな決心を持って、とはいえ事の破れにならぬようにと、余儀なく祈る返事を出した。その後も五十金の借用を申込んだこともある。久佐賀も彼女の家を度々(たびたび)訪ずれた。

久佐賀と懇意になった後(のち)、直に彼女の一家は本郷へ引移った。荒物店を譲って、丸山福山町の阿部家の山添いで、池にそうた小家へ移った。其処は「守喜(もりき)」という鰻屋(うなぎや)の離れ座敷に建てたところで、狭くても気に入った住居であったらしかった。家賃三円にて高しと

いったのでも、質素な暮しむきが見える。現にこの間（あいだ）、歌舞伎座で河合、喜多村の両優によって、はじめて女史の作が劇として上場されたあの「濁り江」は、この家に移ってから、その近傍の新開地にありがちな飲屋の女を書いたものであった。女史は其処に移ってからもそうした種類の人たちに頼まれて手紙の代筆をしてやった。ある女は女史の代筆でなくてはならないとて、数寄屋（すきや）町の芸妓になった後もわざわざ人力車に乗って書いてもらいに来たという。「濁り江」のお力は、その芸妓になった女をモデルにしたともいわれている。そしてそこが終焉（しゅうえん）の地となった。

引越しの動機が彼女の発起でないことは、

国子はものに堪忍(たえ)ぶの気象とぼし、この分厘にいたく厭(あき)たるころとて、前後の慮(おもんばかり)なくやめにせばやとひたすら進む。母君もかく塵(ちり)の中にうごめき居らんよりは小さしといへど門構への家に入り、やはらかき衣類にても重ねまほしきが願ひなり、されば我もとの心は知るやしらずや、両人とも進むること切なり。されど年比(としごろ)売尽し、かり尽しぬる後の事とて、この店を閉ぢぬるのち、何方(いずかた)より一銭の入金のあるまじきをおもへば、ここに思慮を廻(めぐ)らさざるべからず。さらばとて運動の方法を

さだむ。まづかぢ町(ちょう)なる遠銀(えんぎん)に金子(きんす)五十円の調達を申込む。こは父君存生(ぞんしょう)の頃よりつねに二、三百の金はかし置(おき)たる人なる上、しかも商法手広く表をうる人にさへあれば、はじめてのこととて無情(なさけな)くはよもとかゝりしなり。

(「塵中日記」より)

私はもうこの辺で、その人のためには、茅屋(ぼうおく)も金殿玉楼と思いなして訪(と)いおとずれた、その当時はまだ若盛りであった、明治文壇の諸先輩の名をつらねることも、忘れてならない一事だろうと、ほんの、当時の往

来だけでもあっさり書いておこうと思う。

第一に孤蝶子——馬場氏が日記の中で巾(はば)をきかしている——先生の熱心と、友愛の情には、女史も心を動かされた事があったのであろう。その次には平田禿木(ひらたとくぼく)氏であろう、この二人のためにはかなり日記に字数が納められている。そしてこの二人の親密な友垣の間にあって、女史は淡い悲しみとゆかしさを抱いていたのであろう。

「水の上日記」五月十日の夜のくだりには、池に蛙(かえる)の声しきりに、燈影(とうえい)風にしばしばまたたくところ、座するものは紅顔の美少年馬場孤蝶子、はやく高知の名物

とたたえられし、兄君辰猪が気魂を伝えて、別に詩文の別天地をたくわゆれば、優美高潔かね備えて、おしむところは短慮小心、大事のなしがたからん生れなるべけれども歳は、廿七、一度跳らば山をも越ゆべしとある。

　平田禿木は日本橋伊勢町の商家の子、家は数代の豪商にして家産今漸くかたぶき、身に思うこと重なるころとはいえ、文学界中出色の文士、年齢は一の年少にして廿三とか聞けり。今の間に高等学校、大学校越ゆれば、学士の称号目の前にあり、彼れは行水の流れに落花しばらくの春とどむる人であろうといい、（親

密々々）これは何の言葉であろうと言い、情に走り、情に酔う恋の中に身を投げいれる人々と、何気なくは書いているものの、更けて風寒く、空には雲のただずまい、月の明暗する窓によりて、沈黙する禿木氏と、燈火の影によく語る孤蝶子との中にたって、茶菓を取まかなっていた女史の胸は、あやしくも動いたのであろう。

此処へ川上眉山氏がまた加わらなければならない。彼女は初めて逢った眉山氏をどう見たろうか、彼女はこう言っている。

年は廿七とか、丈高く、女子の中にもかゝる美し

き人はあまた見がたかるべし、物言ひ打笑(うちえ)むとき頬のほどさと赤うなる。男には似合しからねど、すべて優形(やさがた)にのどやかなる人なり、かねて高名なる作家ともおぼえず心安げにおさなびたり。とて、孤蝶子の美しさは秋の月、眉山君は春の花、艶(えん)なる姿は京の舞姫のようにて、柳橋(やなぎばし)の歌妓にも譬(たと)えられる孤蝶子とはうらうえだと評した。

　馬場氏の思いなげに振舞うのが、禿木の気を悪くするのであろうと、侘(わび)しげにも言っている。そして眉山氏も一葉党の一人になってしまった。禿木は孤蝶子との間に疑いを入れて、ねたましげでもあったであろう。

それもそのはずで、

孤蝶子よりの便りこの月に入りて文三通、長きは巻紙六枚を重ねて二枚切手の大封（おおふう）じなり。

とある。同じ中に、

優なるは上田君ぞかし、これもこの頃打しきりてとひ来る。されどこの人は一景色（ひとけしき）ことなり、万（よろず）に学問のにほひある、洒落（しゃらく）のけはひなき人なれども青年の学生なればいとよしかし

とあるは、柳村、敏（びん）博士のことである。その他に一葉の周囲の男性は、戸川秋骨（とがわしゅうこつ）、島崎藤村、星野天知（てんち）、関如来（にょらい）、正直正太夫（しょうじきしょうだゆう）、村上浪六（なみろく）の諸氏が足近かった。

正太夫は緑雨（りょくう）の別号をもつ皮肉屋である。浪六はちぬの浦浪六と号して、撥鬢奴（ばちびんやっこ）小説で溜飲（りゅういん）を下げてしかも高名であった。渋仕立（しぶじたて）の江戸っ子の皮肉屋と、伊達小袖（だてこそで）で寛濶の俠気を売物の浪六と、舞姫のように物優しい眉山との三巴（みつどもえ）は、みんな彼女を握ろうとして、仕事を巧みすぎて失敗した。眉山は強（し）いて一葉の写真を手に入れたのちに、他から出た噂（うわさ）のようにして、眉山一葉結婚云々と言触（いいふら）したのでうとまれてしまった。

正太夫年齢は廿九、痩（や）せ姿の面（めん）やうすご味を帯びて、唯口許（くちもと）にいひ難き愛敬（あいきょう）あり、綿銘仙（めんめいせん）の縞（しま）がらこまかき給（あわせ）に木綿（もめん）がすりの羽織は着たれどうら

は定めし甲斐絹（かいき）なるべくや、声びくなれど透通（すき）れるやうの細くすずしきにて、事理明白にものがたる。かつて浪六がいひつるごとく、かれは毒筆のみならず、誠に毒心を包蔵せるのなりといひしは実に当れる詞（ことば）なるべし

と評した斎藤緑雨を、そう言ったほど悪くはあしらいもしなかった。かえって二人は人が思うより気が合った。皮肉屋同士は会心の笑みをうかべあいもした。妻帯の事についてもかなり打明けて語りあっている。でありながら最後に（彼れの底の心は知らぬでもない）と冷たくあしらったのは、あまり正太夫が自分の筆に

なる鋭利な小説評が、その当時の文壇の勢力を左右した力をもって、折々何事にもあれ一葉の行方を差示(さししめ)し顔に、その力量をほのめかして、感得させようとしたのから、反抗を買ってしまった。浪六にはその前年から頼んであった金策のことで、大晦日(おおみそか)の夜も待明(まちあか)したのであったが、その年の五月一日になってもまだ絶えて音信をしなかったので、

誰もたれも言ひがひのなき人々かな、三十金五十金のはしたなるに夫(それ)をすらをしみて出し難しとや、さらば明かに調(ととの)へがたしといひたるぞよき、えせ男作りて、髭(ひげ)かき反(そら)せどあはれ見にくしや

と吐（は）［＃ルビの「は」は底本では「ほ」］きだすように言われている。その他に樋口勘次郎は、身は厭世教を持したる教育者で、しかも不娶（めとらず）主義の主張者でありながら、おめもじの時より骨のなき身になったといって、

勿体なくも君を恋まつれる事幾十日、別紙御一覧の上は八つざきの刑にも処したまへ

とて熱書を寄せもした。されば、

にくからぬ人のみ多し、我れはさは誰と定めて恋渡るべき、一人のために死なば、恋しにしといふ名もたつべし、万人のために死ぬればいかならん、知人（しるひと）なしに、怪しうこと物にやいひ下されんぞそ

れもよしや。

と思慕の情を寄せてくれる人々に対して誠を語っている。とはいえ、それは思われるに対してである。物思う側の彼女をも、思われた唯一（ただ）人の幸福者をも記（しる）そう。

四

さても、さほどまでに多くの人々に懐かしまれた女史の、胸の隠処（おくが）に秘めた恋は、片恋であったであろうか、それともまた、互に口に出さずとも相恋の間柄であったであろうか。日記に見える女史の心は動揺して

いる。すくなくとも八分の弱身はあったように見られる。はじめから女史はその人を恋人として見たのではない。最初は小説の原稿を見てもらうために、先生として逢い、同時に、原稿を金子（きんす）に代えることも頼んだのだ。その人の友達が一葉の友でもあったので、二人を紹介したのがはじめだった。ところが、その人は、友達のように親しく一葉に同情し、友達よりも深い信実心（まごころ）を示した。いかほど用心深い性質（さが）でも、若い女には若い血潮が盛られている。十九の一葉はその人を心から兄と思い慕った。そしてその慕わしさは恋心となった。

「よもぎふ日記」二十六年四月六日の記に、

こぞの春は花のもとに至恋の人となり、ことしの

春は鶯(うぐいす)の音に至恋の人をなぐさむ。

春やあらぬわが身ひとつは花鳥の

あらぬ色音にまたなかれつゝ

とある末に、

もゝのさかりの人の名をおもひて、

もゝの花さきてうつろふ池水の

ふかくも君をしのぶころかな

とある。桃の花のうつらう水というのこそ、彼女の二

なき恋人の名なのである。その人こそ現今(いま)も『朝日新

聞』に世俗むきの小説を執筆し、歌沢(うたざわ)寅千代の夫君として、歌沢の小唄(こうた)を作りもされる桃水(とうすい)、半井(なからい)氏のことである。

半井氏を一葉はどれほど思っていたであろうか、そして半井氏は――

昔時(むかし)は知らずやや老いての半井氏は、訪客の談話が彼女の名にうつると、迷惑そうな顔をされるということである。そして一ことも彼女については語らぬということである。関如来氏の談によれば、ある日朝から一葉が半井氏を訪(たず)ねたことがある。彼女の声が、訪れたということを格子戸(こうしど)の外から告げられると、二階に

執筆中の半井氏は不在（るす）だと言ってくれと関氏に頼んだ。関氏が階下へおりてゆくと、彼女は上って坐って待っていた。関氏は何時（いつ）も彼女の家を絶えずおとずれる訪客の一人であって、いつも彼女に饗応（きょうおう）をうける側の人であったので、こういう時こそと、自らが主人気取りで、半井氏が留守ならばとしきりに暇（いとま）を告げようとする女史を引止めたうえに、鮨（すし）などまでとって歓待した。そして午（ひる）ごろまで語りあった。階上の半井氏は、時がたつにしたがって、階下に用事があるようになったが、さりとて留守と言わせたのでおりる事は出来ず、人を呼ぶことは出来ず、その上灰吹（はいふき）をポンとならして

煙管（キセル）をはたくのが癖であることを、彼女がよく知っているので、そんな事にまで不自由を忍ばなければならなかったので、彼女が辞し去ったあとで、こんな事ならば逢って時間をつぶした方がよかったと呟（つぶや）いたということである。その一事（ひとこと）をもって総（すべ）ての推測を下すのではないが、憎くはないがこの女一人のためには、何もかも失ってもと思い込むほどの熱情は、なかったのであろう。その、どこやら物足らなさを、彼女の魂の中の暴君が、誇を疵（きず）つけられたように感じ、恋もし、慕いもしたが、また悔みもした。

　勝気の女はかなしかった。女人の誇りを、恋人の前

でまで、赤裸（せきら）に投捨てられないものの恋は、かなしいが当然で、彼女は自ら火を点（つ）けた焰（ほのお）を、自らの冷たさをもって消そうと争った。

彼女の恋愛記は成恋でもなければ勿論（もちろん）失恋でもない。恋というものに対して、自らの魂のなかで、冷熱相戦った手記であると同時に、肉体と霊魂との持久戦でもあった。彼女もまた旧道徳に従って、秘（ひそか）に恋に苦しむのを、恋愛の至上と思っていたらしい。

彼女を恋に導いた友達——野々宮某女は、思いあがった彼女の誇りを利用して、巧みに離間しようとして成功した。とはいえ、その実それは、一葉自身の弱

点でもあった。

　恋するものの女らしさ――私はそう思う時に女心の優しさにほほえまずにはいられない。それは彼女が初めて島田髷（まげ）に結（ゆ）った時のことである。その日彼女が半井氏を訪れたのは、人の口に仇名（あだな）がのぼり、あらぬ名をうたわれるのを憤って、暫時、絶交しようと思っての訪問であった。そうした日であるのに、珍らしくも一葉は島田髷の初結（はつゆい）をした。その日は二十五年六月二十五日のことである。

「しのぶぐさ日記」には、

　梅雨（つゆ）降りつゞく頃はいと侘（わび）し、うしがもとにはい

と子君伯母君二処居たり、君は次の間の書室めきたるところに打ふし居たまへり。雨いたく降りこめばにや雨戸残りなくしめこめていと闇し、いと子君伯母なる人に向ひて、御覧ぜよ樋口さまのお髪のよきこと、島田は実によく似合給へりといへば、伯母君も実に左なり〱、うしろ向きて見せたまへ、まことに昔の御殿風と見えて品よき髷の形かな。我は今様の根の下りたるはきらひなどいひ給ふ。半井君つと立て、いざや美しうなりたまひし御姿みるに余りもさし込めたる事よとて、雨戸二、三枚引あく、口の悪き男かなとて人々笑ふ。

我もほゝゑむものから、あの口より世になき事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我しらずにらまへもしつべし。

とある。けれども、何のためにさまで憎く思ったかといえば、その前日、彼女が師の家にて同門の友達と雑談にふけったおり、誰彼の噂（うわさ）に夜をふかすうちに、姦（かしま）しきがつねとて、誰にはかかる醜行あり、彼れにはこうした汚行ありと論（あげ）つらうを聞いて、彼女はもう臥床（ふしど）に入ろうとした師歌子の枕許（もと）へいって身の相談をしようとした。それは、それより前の日に、伊藤夏子という人が席を立って一葉をものかげに呼び、声をひ

そめて、

「貴女は世の中の義理の方が重いとお思いなさるか、それとも御家名の方が惜いと思いなさるか」

と聞かれたので、

「世の義理は重んじなければならないものだと私は思います。けれども家の名も惜くないことはありません。甲乙がないといいたいけれど、どうも私の心は家の方へ引かれがちです。何故というのに、自分ばかりのことでなく、母もあれば兄妹もあるので」

と答えた。

「では言わなければならないことでありますが、貴女

は半井さんと交際を断つ訳にはいかないでしょうか」といった。

彼女は友の視線があまりまぶしいので、何事と知らねど胸の中にもののたたまるように思われた。

「妙なことを仰しゃるのね。それは何時ぞやもお咄したとおり、あの方はお齢も若いし、美しい御顔でもあるし私が行ったりするのは、憚からなけりゃなるまいと思っています。幾度交際を断とうと思ったかも知れはしません。けれど受けた恩義もあり、そうは出来かねているのよ、私というものの行いに、汚れのないのを御存知でありながら……」

と彼女は怨みもした。
「そりゃあ道理はそうですけれど――まあ訳はいずれ話しますが、どうしても交際が断てないというのならば、私でも疑うかもしれませんよ」
そういって友は立別れた。一葉は、ふとその日の訝しい友の言葉を思い出したので、歌子によってその惑いを解いてもらおうとしたのであった。
「半井さんの事は先生がよく御承知であって、訪問をお止めにならないのを、何ぞ噂するのでございましょうか」
と歌子にたずねた。すると歌子の返事は、実に意外に

彼女の耳に鳴り響いた。

「では、行末の約束を契ったのではないのか」と。

彼女は仰天して、七年の年月を傍においた弟子の愚直な心を知らないのかと、怨み泣いた。

「でも、半井氏という人は、お前は妻だと言触らしているというではないか。もし縁があってゆるしたのならば、他人がなんと言おうとも聞入れないがよい。もしそうでないのならば、交際しない方がよいだろう」と歌子は諭した。それ故にこそ彼女は梅雨の日を訪ずれたのである。そして、絶交する人の目に、島田に結んだ姿を残そうとしたのである。

愛するあまりに、妻とも言ったであろうかの恋人に、その故に絶交しなければならない彼女は、たった一月前には思う人の病を慰めるためにと、乏しい中から下谷の伊予紋《いよもん》（料理店）へよって、口取りをあつらえたり、本郷の藤村へ立寄って蒸《む》菓子を買いととのえたりして訪れていた。ある時は、朝早くから訪れて午過《ひるす》ぎまで目ざめぬ人を、雪の降る日の玄関わきの小座敷につくねんと、火桶《ひおけ》もなく待《ま》ちあかしていたこともあった。彼女が手伝って掃除《そうじ》すると、まめやかな男主《あるじ》は、手製のおしるこを彼女にと進めたりした。彼女はその日のことを記した末、

半井うしがもとを出（いで）しは四時ころ成りけん、白（はく）皚々（がいがい）たる雪中、りん〳〵たる寒気をおかして帰る。中々おもしろし、堀ばた通り九段の辺（あたり）、吹（ふき）かくる雪におもてむけがたくて頭巾（ずきん）の上に肩かけすつぽりとかぶりて、折ふし目（め）斗（ばかり）さし出すもをかし、種々の感情胸にせまりて、雪の日といふ小説の一編あまばやの腹稿なる。

とある。恋に対して傲慢（ごうまん）であった彼女にも、こうした夢幻境もあった。恋という感想に、

我はじめよりかの人に心をゆるしたることもなく、はた恋し床（ゆか）しなどと思ひつることとかけてもなかり

き。さればこそあまたたびの対面に人げなき折々はそのことゝもなく打かすめてものいひかけられしことも有しが、知らず顔につれなうのみもてなしつるなり。さるを今しもかう無き名など世にうたはれて初て処せくなりぬるなん口惜しとも口惜しかるべきは常なれど、心はあやしき物なりかし、この頃降りつゞく雨の夕べなどふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿などそこともなくおもかげに浮びて、彼の時はかくいひけり、この時はかう成りけん、さりし雪の日の参会の時手づから雑煮にて給はりし事、母様の土産にしたま

へと、干魚の瓶漬送られしこと、我参る度々に嬉しげにもてなして帰らんといへば今しばし〳〵君様と一夕の物語には積日の苦をも忘るるものを、今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしこととまして我ためにとて雑誌の創立に及ばれしことなどいへば更なり、久しう病（わず）らひ給ひその後まだよわよわと悩ましげながら、夏子さま召上りものは何がお好きぞや、この頃の病のうち無聊堪（ぶりようたえ）がたく夫（それ）のみにて死ぬべかりしを朝な夕なに訪ひ給ひし御恩何にか比せん、御礼には山海の珍味も及ぶまじけれどとて、兄弟などのやうにの給ふ。

我料理は甚だ得手なり殊に五もくずし調ずること得意なれば、近きに君様正客にしてこの御馳走（ごちそう）申すべしと約束したりき。さるにてもその手づからの調理ものは、いつのよいかにして賜はることを得べきなど思ひ出（いづ）るまゝに有しこと恋しく、世の人のうらめしう、今より後の身心ぼそうなど取あつめて一つ涙ひぬものから、かく成行（なりゆき）しも誰ゆゑかは、その源はかの人みづから形もなき事まざ〳〵言触しうしたればこそ……

とあるが、その実は野々宮某という女友達の嫉妬（しっと）から言触らされたのを知らなかったのである。

彼女は恋人から離れたと思い信じたが、彼女の心はそうゆかなかった。或時は、

吹風のたよりはきかじ荻（おぎ）の葉の
　みだれて物を思ふころかな

とまで思い乱れ、またある時は伯父（おじ）の病床に侍して（かゝる時の折ふしにも猶（なお）彼の人を忘れ難きはなぞや）といい、ある時は用もなきに近き路（みち）をえらんでゆき、その人の住む家の前を通りて見、その家の下女（げじょ）に行逢（ゆきあ）いて近状を聞き、（万感万嘆この夜睡（ねむ）ることかたし）と書いたのは、彼女の青春二十一歳のことであった。次の年の一月二十九日雪の降るのを見つつ、

わが思ひ、など降る雪のつもりけん
　つひにとくべき中にもあらぬを

と嘆き四月の雨の日の記には、

わが心より出たるかたちなればなどか忘れんとして忘るゝにかたき事やあると、ひたすら念じて忘れんとするほど、唯身にせまりくるがごとおもかげのまのあたりに見えて得(え)堪ゆべくも非(あら)ず、ふと打みじろげばかの薬の香のさとかをる心地して思ひやる心や常に行通ふとそゞろおそろしきまでおもひしみたる心なり、かの六条の御息所(みやすどころ)のあさましさを思ふにげに偽りともいはれざりける。

おもひやる心かよはゞみてもこん
　さてもやしばしなぐさめぬべく

恋は、

見ても聞きてもふと思ひ初(そ)むるはじめいと浅し、
いはでおもふいと浅し、
これよりもおもひかれよりも思はれぬるいと浅し、
これを大方(おおかた)のよに恋の成就(じょうじゅ)とやいふならん、逢(あい)
そめてうたがふいと浅し、
わすられてうらむいと浅し、
逢んことは願はねど相思はん事を願ふいと浅し、

名取川（なとりがわ）瀬々のうもれ木あらはればと人のため我ためをしむたぐひ、うきに過たる年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心はかしこに通ふものか、身は引離れてことさまになりゆく、さては操を守りて百年（ももとせ）いたづらぶしのたぐひ、いづれか哀れならざるべき、されど恋に酔ひ恋に狂ひ、この恋の夢さめざらんなかなかこの夢のうちに死なんとぞ願ふめる、おもへば浅きことなり――誠入立（いりたち）ぬる恋のおくに何物かあるべきもしありといはゞみぐるしく、憎く、憂く、愁（つら）く、浅間しく、かなしく、さびしく、恨めしく取つめていはんに

は厭(いとわ)しきものよりほかあらんとも覚(おぼ)えず、あはれその厭ふ恋こそ恋の奥なりけれ……

彼女の恋の信仰は頑固であった。彼女は何処までも人生のほろにがさを好んだ。

暖かくかなしい心持を抱(いだ)いて帰った雪の途中で出来上った小説「雪の日」は、その翌年に発表された。十六になる薄井(うすい)の一人娘お珠(たま)が、桂木(かつらぎ)一郎という教師と家出をしたというのが筋である。「媒(なかだち)は過し雪の日ぞかし」ともあれば「かくまでに師は恋しかりしかど、ゆめさらこの人を夫と呼びて、倶(とも)に他郷の地をふまんとは、かけても思ひよらざりしを、行方なしや迷ひ…

…窓の呉竹(くれたけ)ふる雪に心下折(したお)れて、我も人も、罪は誠の罪になりぬ」

とある。言わずともわが身――世馴(よな)れぬ無垢(むく)の乙女(おとめ)なればこうもなろうかと、彼女自身がそうもなりかねぬ心の裏(うち)を書いて見たものと見ることが出来よう。

　彼女は恋に破れても名には勝った。困窮は堪(たえ)忍び得たが病苦には打敗(うちまけ)てしまった。彼女の生存の末期は作品の全盛時にむかっていた。『国民の友』の春季附録には、江見水蔭(えみすいいん)、星野天知(ほしのてんち)、後藤宙外(ごとうちゅうがい)、泉鏡花に加えて彼女の「別れ路(みち)」が出た。評家は口をそろえて彼女

を讃えた。世人はそれを「道成寺」に見たて、彼女を白拍子一葉とし、他のものを同宿坊と言伝えたほどであった。それは二十九年一月のことである。その年の四月には咽喉が腫れ、七月初旬には日々卅九度の熱となった。山竜堂樫村博士も、青山博士も医療は無効だと断言した。十一月の三日ごろから逆上のために耳が遠くなってしまった。そして二十三日午前に逝去した。かつて知人の死去のおりに持参する香奠がないとて、

我こそは達磨大師になりにけれとぶらはんにもあしなしにして

といい、また他行のため洗張り（あらいはり）させし衣を縫うに、はぎものに午前だけかかり、下まえのえり五つ、袖（そで）に二つはぐとて、

　宮城（みやぎ）のにあらぬものからから衣なども木萩（こはぎ）の
　しげきなるらん

と恬然（てんぜん）と一笑した人の墓石は、現今も築地（つきじ）本願寺の墓地にある。その石の墓よりも永久に残るのは、短い五年間に書残していった千古不滅の、あの名作名篇の幾つかである。

――大正七年六月――

昭和十年末日附記　随筆集『筆のまに〳〵』は、佐佐木竹柏園（ちくはくえん）先生御夫妻の共著だが、その一二五頁「思ひ出づるまに〳〵」大正七年六月の一節に「自分がいつか夏目漱石さんの所へ遊びに行って昔話などをした時、夏目さんが、自分の父と一葉さんの父とは親しい間柄で、一葉さんは幼い時に兄の許嫁（いいなずけ）のようになっていた事もあったと言われた。明治の二大文豪の間に、さる因縁があったとは面白いことである」とあった。

底本：「新編　近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店
　　１９８５（昭和60）年11月18日第1刷発行
　　　２００１（平成13）年7月9日第5刷発行
底本の親本：「近代美人伝」サイレン社
　　１９３６（昭和11）年発行
初出：「婦人画報」
　　１９１８（大正７）年6～8、10月
入力：小林繁雄
校正：門田裕志
２００６年1月21日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。